

平成26年度 課程博士学位請求論文要旨

日蓮聖人における女性観の研究

立正大学大学院
文学研究科仏教学専攻

穂坂 悠子

本論文は、『日蓮聖人における女性観の研究』と題し、現代的な社会問題に相応する教化法を導き出す事を目的として、日蓮聖人真蹟遺文を中心に、聖人が受容し主張した女人成仏論とその関連事項について研究したものである。

第一章は、「釈尊における男女平等観」について考察した。日蓮聖人は法華経こそ釈尊の本意が説かれる最勝の經典であると位置付けられているが、社会一般からは、「変成男子」や「五障」等の字句が見えることから、「女性蔑視の宗教」と指摘されることもある。大乘仏教は、本来釈尊への思想回帰が旗印であった。それならば、歴史上の釈尊の平等思想・女性観は果たしてどのようなものであったか。本章では最初期の經典（最古の經典ほど本来の思想に近い）を検証し、釈尊の男女平等観を確認した。考察の結果、釈尊の根本思想は、男女の性差を理解された上での平等思想であったことが解る。この釈尊の平等思想は大乘仏教である法華経に反映されている。

第二章では、「日蓮聖人所引の諸經論における女性観」について検討した。聖人は、『銀色女経』、『華嚴経』、『涅槃経』、『大智度論』等の女性蔑視的表現が散見される諸經論の説示を指摘し、法華経だけが真の女人即身成仏を説き、女人を救済できる最も優れた經典であることを強調されている。本章では日蓮聖人遺文にみえる聖人閲読・引用の經論釈に説かれる女性観の内容について検討した。

第三章では「法華経の女性観」として、法華経に説かれる提婆品の「龍女成仏」説、勸持品の「比丘尼授記」説、薬王品の「女人往生」説について、それぞれ検討を試みた。考察の結果、法華経提婆品の「龍女成仏」は「変成男子」の成仏ではなく即身成仏であることが理解された。本研究ではこの聖人の提婆品の解釈を前提として、女人成仏論、女人教化について検討している。次に勸持品には、女人の授記が叙述されている。これによって摩訶波闍波提比丘尼には一切衆生喜見如来の記別、耶輸陀羅比丘尼には具足千万光相如来の記別が授けられ、更には学・無学八千人の比丘尼をはじめとする一切の女人の成仏が保証されたのである。これらによって、法華経における女人成仏の教えを確認できる。

第四章では、「天台大師智顛と妙楽大師湛然の女性観」として、両師の独自の女人成仏論を辿り、日蓮聖人に至るまでの女人成仏論の流れを概観した。天台大師は『法華文句』序品釈において摩訶波闍波提比丘尼と耶輸陀羅比丘尼は、いずれも修行を成就して成仏すべき存在であると説いており、授記品釈において、法華経は男女の別なく、全ての衆生に成仏の記別を授ける旨を表明し、法華経が女人成仏を許す点において勝れた經典であると述べていることを確認した。そして『法華文句』提婆品釈において、龍女が釈尊に宝珠を献上する叙述について、天台大師は円教の因果を具えた一念成仏とし、龍女が一身一切身を顕現する普現色身三昧を得ているため、即身成仏していると説く。更に『菩薩処胎経』にも即身成仏が説かれているとする。しかし、日蓮聖人は『菩薩処胎経』の説示は爾前円教の範疇であり、即身成仏ではなく生身得忍の成仏であると判断されている。次に、妙楽大師は『法華文句記』卷八提婆品釈で、龍女の成仏は、龍女が分段身を捨てずに即身成仏したとする。そして「変成男子」を、衆生に速疾な成仏を見せる権の説とし、本来は分段身すなわち女身そのままの成仏こそが円教の成仏であるとする。また、『菩薩処胎経』の成仏を円教の実説とし、「変成男子」を権実不二円融の成仏とする。

第五章では、「日本仏教諸先師の女性観」として、まず伝教大師最澄の龍女即身成仏論の解釈について、『法華秀句』即身成仏化導勝八の女人即身成仏の主要な説示を検討した。最澄の女人成仏観の特徴は、龍女が持つ「畜生」「女身」「幼少の身」という諸要素を挙げながら、女人の即身成仏が法華

経の「経力」によって実現すると解釈する点にある。そして、龍女成仏を権実一体の成仏とし、「変成男子」については、差別即平等の円融思想によって解釈している。次に、鎌倉新仏教における三師について検討した。法然上人の女人往生論は、弥陀の四十八願中の第十八願には男女の区別のない往生が示されているが、第三十五願（「女人往生の願」）には女性は女身を捨てて変成男子とすることを求める誓願が立てられていることとする。したがって法然上人は第三十五願に基づく限り「変成男子」「転女成男」の形での往生を説いているといえる。次に親鸞聖人の女人往生論は、師法然上人の女人往生論をそのまま継承したものであり、女人の五障・三従を認め、『大無量寿経』の第三十五願に基づいた女人往生論を積極的には説いていない。また「変成男子」の語を用いていることから女人の即身成仏という発想は存在していなかったことは明らかである。次に、道元禅師の女人成仏観については「礼拝得髓」の記述のなかで「龍女成仏」譚における龍女の八歳の娘が男性の身体となって成仏したという「変成男子」説を前提にして論を展開していることから、道元禅師の女人成仏論は「変成男子」の成仏であったと思われる。以上の検討によって、伝教大師は天台大師の釈を受けた女人即身成仏説であり、それに対し鎌倉新仏教における三師の女人成仏は、「変成男子」の成仏論に立っていることが確認できた。

第六章では、「日蓮聖人における女人教化」について、女性信徒宛の遺文を基に個別的な強化の特徴を試みた。聖人の女人教化は、女性信徒個人の立場や境遇、機根の浅深などによって異なり、譬喩や故事等を活用し、表現に工夫をされる等、それぞれに独自性が見られる。特に、①供養を捧げる女性達の深い志を讃歎し、その功德について法華経の証文を示し未来成仏を教示されることを、②全ての女性に「悲母性」を見ておられたこと、③法華経提婆品の龍女即身成仏の経説を承け龍女の即身成仏の手本とし、勸持品の摩訶波闍波提比丘尼と耶輸陀羅比丘尼の授記説をもって、女性信徒の未来成仏を保証し安堵を与えられていたこと、④末代の世に生きる全ての女性が変成男子の成仏ではなく即身成仏によって救済するという考えを基盤として教化されていたこと、⑤釈尊における平等大慧の精神を継承し、男女ともに尊重しあう平等観を基として教化されていたこと、等が特徴として挙げられる。

第七章では、「日蓮聖人における女人成仏論」について、前章での検討を踏まえた上で考察を行った。聖人における法華経弘通の生涯を鎌倉期・佐渡期・身延期の三期に分け、一覧表を作成し、詳しい検証を試みた。聖人は独自の一念三千論に基づく女人の即身成仏論を展開されており、龍女成仏を、女性全ての成仏を顕すものとした上で、その原理を「一念三千」に求め、「改転の成仏」、つまり女身を男身に改めた上での成仏は「有名無実」（定五八九頁）として退けておられる。聖人はこうした「一念三千の成仏」が即ち「即身成仏」であるとし、龍女および女性全般の救済の原理であるとされるのである。聖人は提婆品の「変成男子」の意味を経説に基づいて正確に理解されており、龍女は既に海中において即身成仏していることは明らかであり、当然、変成男子を述べる必要性は全くなかったのである。更に聖人は「畜身」「若身」「女性」である龍女の成仏は、法華経以外の諸經典にあっては一切望みがないとし、その龍女に対して法華経だけが「即身成仏」という形での救済を可能にしているとされている。聖人はまさにこの点に、他経に超越した法華経の救済力を見るのである。聖人は女性信徒達（日妙・富木尼・日眼女・千日尼等）に対する教化の中で、比丘尼授記説を用いることによって、女性の立場に即した効果的な教導を行われていた。龍女即身成仏説は畜身の成仏という側面も有するが、比丘尼授記説は、女性信徒にとって自然と自らの身に置き換えられ、教化の

上で効果的であったとも拝察される。

第八章では、聖人の女人成仏論に関連する経論釈を『注法華経』の書き込み部分から確認し、それが聖人の女人成仏思想と如何なる関連があるのかについて検証を行った。女人成仏に関する引用文は、主に巻五の「提婆品」、「勸持品」、巻七の「薬王品」の周辺・表裏に見られた。

第九章では、説話集の引用に見る日蓮聖人の女人成仏観として『宝物集』を中心に検証を行った。聖人の著作や書状には説話集からの引用が多く見られることは周知のとおりである。その中でも、平康頼著作『宝物集』の「不邪淫戒」には、聖人の遺文にみられる説示と一致する文が確認できる。

聖人は封建社会の男尊女卑の思想、および諸経典が説く女性蔑視の思想等を超克し、女性の価値・役割・重要性を強く深く認識し、女性に対する細やかな教化をされた。その根底には、真実の成仏の手本・現証として女人成仏を説示している法華経の教えがあるのである。聖人は、提婆品龍女成仏の経文の表面上の「変成男子」という語（教え）を必要とせず、女性が身を捨て転ずることなく法華経によって即身成仏することを経文上より正しく認識し、その思想が伝統的法華仏教史上の先師の教示と一致することを確認し、女人の即身成仏を強く主張された。この聖人の主張は、「変成男子」（改転の成仏）を超えられなかった他の鎌倉新仏教の祖師を凌駕する先進的な思想であった。